

機関番号：34415

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 年度～2010 年度

課題番号：20520144

研究課題名（和文） 19 世紀末から 20 世紀初頭の英独仏米における日本像の比較研究

研究課題名（英文） A Comparative Study of Japan/ese Images in England, Germany, France, and America in the Late Nineteenth And Early Twentieth Centuries

研究代表者 水藤 龍彦 (SUITO TATSUHIKO)

追手門学院大学・国際教養学部・教授

研究者番号：60131413

研究成果の概要（和文）：

英独仏米という 4 つの異なる視座から、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて日本（人）像がどのようにこれらの国々で、取り込まれ、受容され、加工されたかを見てきた。本研究課題は、その焦点が若干拡散してしまったという反省点はあるが、例えば、別の時代において、これら 4 カ国に対して日本、日本芸術、日本人が及ぼした影響を探るなど今後の研究に有益な知見を提供することができるかと強く期待される。

研究成果の概要（英文）：

In this study, we try to show how Japanese images were absorbed, accepted, and mythologized in France, England, Germany and America in the late nineteenth and early twentieth centuries. Although this Kaken project may seem diffuse in its focus, it surely offers some useful findings for future discussion on the influence of Japan, Japanese arts, and the Japanese people upon these four countries more than a century ago.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：比較文化

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：日本像 ジャポニスム サムライ 19 世紀末 万国博覧会 ブリンクマン

## 1. 研究開始当初の背景

日本では1979年に「ジャポニスム学会」の前身が創設され、『ジャポニスム入門』（思文閣、2000）のような成果を生んでおり、イギリス、フランスについてはすでに研究に一定の厚みがあるが、ドイツやアメリカに関しては数ページの概略的な内容に留まっている。また全体的にも日本の美術・工芸の影響の広がりについては、かなり詳しく記述されているが、内容的な深まりに関してはいまだ不十分である。

海外における日本美学や日本像の形成史は、従来国別に研究の対象となってきた憾が否めない。またドイツやアメリカにおけるそれはいまだ重視されてこなかった。

## 2. 研究の目的

本研究は 19 世紀後半にヨーロッパで始まった、日本の美術工芸の受容を中心として形成された「日本像」が 20 世紀初頭にいたる間に、どのように変容していくかを、イギリス、ドイツ、フランス、アメリカ各国を比較

しながら具体的に追究するものである。また、従来「国別」に研究の対象となってきた感のある、「ジャポニスム」の形成と変容の歴史を、いままで重視されなかったドイツやアメリカへの視点を加えて見直すことにより、新たな局面を開くことをめざしている。

### 3. 研究の方法

研究方法は大きく分ければ、研究会方式による各国語文献の読解と関連する外国での現地調査の2つである。総数で13回の研究会を行い、日本文化受容初期の代表的な文献や、万国博覧会の報告書、20世紀初頭の百科事典の記述などを読みすすめながら、それらを比較検討することにより、「日本の美学」や「日本(人)像」をめぐって、それぞれの特色や相違点、影響関係を検討していく。さらにその研究成果を踏まえて英独仏で現地調査を行った。

### 4. 研究成果

#### (1) [イギリスにおけるジャポニスムと、その周辺]

日本最初の総領事オールコック卿、デザイナーのドレッサー、建築家ゴドウィン、画家ウィスラー、画家ロセッティ、イラスト画家ピアズリー、あるいはヴィクトリア・アンド・アルバート博物館などが果たした社会的貢献、そして日本での徳川幕府や明治政府の国策などを考慮して、英国でのジャポニスムの進展を唯美主義運動とアーツアンドクラフト運動との関連で辿った。例えば、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館の初代館長コールは、長崎漆器や日本の磁器を購入し、日本の版画を展示し、リバティ店も日本趣味の助長に大いに貢献したが、一方、パリでは、ルイ・ゴンスが林忠正と共同して『日本芸術』を、エドモン・ド・ゴンクールも林の援助を得て喜多川歌麿の本を出版した。また、日本政府の融資を受けた半官半民の起立工商会社は、パリ万国博覧会の開催時に店舗を出した。

このような結果、フランスでは、色刷りの浮世絵が視覚芸術の絵画の発展に寄与したが、英国では日本の浮世絵が直接的に影響を与えたのは主として装飾芸術の分野に限られた。それゆえ、英国の芸術家は概ねヴィクトリア朝の厳格な道徳に従い、エロティックな枕絵のような主題を扱ったピアズリーなどはむしろ例外であった。例えば、日本芸術を賛美した画家クレインは歌川豊国の浮世絵を所持していたが、その影響を子供向けの本のイラストに限定した。それゆえ、英国のジャポニスムはアーツアンドクラフト運動あるいは印刷工房運動などを包摂する唯美主義運動に支配され、ヴィクトリア朝特有の

「趣味の良さ」と不可分であった。

やがて、英国人が扇子や着物を所持する流行期を迎えると、日本の文物や風習を風刺するオペレッタの『ミカド』や『ゲイシャ』が創作されたが、これらは日本人の立ち居振る舞い、あるいは芸者などを題材にして、英国と異なる異国情緒に満ちたアラビアンナイト的世界、あるいは挨拶、キス、腹切りなどの風習や文化の違いを滑稽に描いた娯楽作品である。

このジャポニスムの隆盛の中、アーツアンドクラフト運動に関心を寄せたワイルドはアメリカ講演旅行をして、唯美主義運動の宣伝を行なった。そして、ワイルドはこの講演旅行中に日本的装飾の美とその価値を再認識し、芸術品としての製本に関心を示した。当時は多色刷りの挿絵入りで書籍が出版され、電気製版印刷も始まり、それ以前の印刷技術に比べてはるかに素晴らしい印刷製本が可能となったからである。こうして、ワイルドはロセッティやモリスなどに影響を受け、ウィスラーを真似て文芸作品の装丁などに凝り、挿絵画家クレインに依頼して、ジャポニスムの特徴である、空間(余白)、不均斉などを活かした製本を自著で実践した。

このように、ジャポニスムは英国の国民性あるいは時代の思潮や運動と相まって、主に装飾芸術の分野で花開き、デザイン、建築、美術、オペレッタ、印刷製本などの幅広い領域にその刻印を残した。

#### (2) [フランスにおけるジャポニスムと、その後]

フランスのジャポニスムを考える場合、日本の何に対して興味をもったかという側面と、それが創作の上で具体的にどのような影響を与えたかという側面の両方から考えていく必要がある。

日本が開国してしばらくの間、特に1850年代の終わりから60年にかけては、紹介者が主として外交官ということもあり、日本の民俗・風習・地理・宗教にいたる幅広い対象に関心が寄せられる。1870年代になると日本の芸術の特徴を伝えようとする出版物が現れ、次の1880年代には、関心はさらに深まって、日本美術の専門的解説書が現れる。

こうした日本の美術に対する関心は、やがて、対象、構図、色彩などの点から具体的な創作活動に生かされることになる。特に自然を対象とした分野での影響は著しいが、それが明瞭に見てとれるのは、絵画よりもむしろ装飾・工芸品の分野であろう。本研究では、その点に注目し、特にエミール・ガレの作品を、日本とフランスの両方の特別展において観察することによって、それまで西洋の芸術でとりあげられることのなかった昆虫が、彼の作品においてどのように表現されている

かを考察するとともに、結論的には、ガレの視点は日本の芸術家が生きものに対して投げかけるそれとは異なったものであることを示そうとした。

日本美術への関心は1910年代から20年ごろが最後であり、ジャポニスムはこの時代をもって終焉すると言われるが、日本人の生活・習慣に対する興味は、むしろその頃をもって始まり、文芸活動に及ぶ。したがって、別の、より広い意味でのジャポニスムが、その時代をもってはじまるのではないか、という問題提起を行ないたい。

これを具体的に立証するためにキク・ヤマタという、父親を日本人とし、母親をフランス人とする作家の創作活動においてジャポニスムの展開を跡づけようとした。しかしながら、キク・ヤマタの作品における日本の風景や生活の描写は、フランス人の目を意識した、古典的で絵画的な美的世界に終始し、しかも時代の変化につれ国策にまきこまれた形での日本賛美の側面を否定できない。

(3) [ドイツにおける日本美術受容から20世紀初頭までの日本像]

1873年のウィーン万国博覧会で日本の工芸品に出会ったブリンクマン(Justus Brinckmann)は、その技術的な完成度と美的なセンスに魅せられた。彼は自らが創設した、ハンブルク美術工芸博物館の館長として多くの日本の工芸品や美術の収集を行なっただけでなく、50回を超える講演で日本の文化を紹介して倦むことがなかった。彼の講演や著作にみられる日本は、日常の中で実用性と美的な感覚を同時に満足させる品物が使用されている美的レベルの高い文化を有している。彼は日本の装飾美術のモチーフが詩歌と深い関連を有していることを早くから認識していた。全般的に言えばドイツでの日本文化受容はおもにフランス経由で行われた。ブリンクマンも、もっぱらパリで活動していた同郷のピングや林忠正を介して日本の美術・工芸品を収集していたと見られる。

一方、1905-1909年に編纂されたMeyer百科事典では「日本美術」の項目が14pにわたって記述されているが、「日本」項目の中で日清から日露戦争にかけての記述も詳細を極め、同じく14pにおよんでいる。さらに別項目としての「日露戦争」の記述も14pに及んでおり、列強と肩を並べようとする日本の脅威への関心の高さがうかがえる。ちなみにHarakiriやSamuraiなどの項も登場する。また、1905年に日本を訪れたダウテンダイ(Max Dauthendey)が描いた日本には、極東の異国的=メルヘン的な要素、芸者や富士といったステレオタイプと並んで、なによりも名誉を重んじる武者や外国人の死体など戦争をめぐるイメージが色濃く表れている。日露戦争

そのものを題材にした作品もある。他方日本家屋の簡素でありながら機能的な室内を描いた描写には、のちのモダニズムを思わせる(たとえばバウハウス)個所も見られる。

(4) [19世紀末から20世紀初頭のアメリカにおける「日本(人)」イメージの受容]

1989年に刊行された*Oxford English Dictionary* (第2版)によると、“Geisha”という単語の初出は1891年になっている。また、1910年に刊行された*Encyclopedia Britannica* (第11版)によると、“Geisha”は「娼婦」(prostitute)のイメージで言表化される。『オックスフォード英語辞典』及び『ブリタニカ百科事典』を通じて、日本語の「芸者」は19世紀末から20世紀初頭にかけて、「英語」化される。その際、「日本(人)=劣等な女性」とする、日本(人)を欧米(人)の下に位置づけるイメージ生成に与する。英語圏諸国でこのイメージ戦略が流通すると並行して、同百科事典は「日本」(Japan)の項目に120頁もの頁数を割き、日本(人)に様々の「意味づけ」を施そうとする。日本(人)に対する病的なまでの興味・関心の原動力は、19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカ社会に絞って、日本(人)に対するアメリカ人の「脅威/驚異」の念の混交、日本(人)を受容する際のアメリカ人の「アンビバレンス」、の表出として解読される。

19世紀末のアメリカにおいて、日本(人)がどのようなイメージで中産階級アメリカ人(=ワスプ)たちに受容されていたかを、当時のアジア系移民に対する恐怖言説「黄禍」を視野に入れながら、アメリカ人作家Stephen Craneの作品から探る。短編“The Duel That Was Not Fought” (1894)中での「キューバ人」登場人物の扱われ方を、日本(人)に対する当時の中産階級アメリカ人のアンビバレントな感情の発露として位置づけ直す。短編中に、「日本人」という語は一度も登場しない。「キューバ人」登場人物という<記号>の中に埋め込まれた諸々のコードを読み解くというプロセスを経由して迂言的に「日本(人)」に言及するという戦略を作家は取る。ワスプ体制派側からの社会文化政治的要請に同調・共振・依存し、人種差別主義的な<反日感情>に肩入れしつつも、それを表立って表現することのかなわない作家のジレンマが見える。「日本(人)=日系移民」に対して正(驚異)/負(脅威)の感情で<揺れる>作家の心の葛藤は同時に、当時の中産階級アメリカ人全体が抱く日本(人)イメージの本質を皮肉にも露呈している。

さらに「大きな古時計」という邦題で日本でも有名な童謡“Grandfather’s Clock” (1876)を19世紀後半のアメリカ社会の中で

生成された一篇のアメリカ詩として捉え直し、精読することで、詩の主題と日本の「武士道」(bushido)の精神とが通底していることを探る。アメリカにおける「男性中心主義体制」の衰退、それに危機感を覚えた中産階級アメリカ人男性の「男性」性復権のための政治的な道具としてこの詩が19世紀後半から世紀末のアメリカにおいて機能し得たのではないかと、発表当時、この詩がアメリカにおいて大人気を博した背景の一端はそこにあるのではないかと、という仮説を立証する。併せて、詩の中に巧妙に埋め込まれた政治的メッセージと日本(人)を「サムライ」(samurai)として「男性化」するイメージ戦略が、19世紀半ばから21世紀初めの今日に至るまで脈々と、アメリカ人男性の女性への「優位性」保持のための戦略と相補的に機能していた可能性について探った。議論の補助線として、1899年にアメリカで刊行されるや世界中でベストセラーになり、21世紀の今日でさえ依然としてその人気アメリカで衰えない新渡戸稲造の著作*Bushido*に適宜言及した。

#### (5) [まとめ]

19世紀のフランスでの日本文化受容は周知のように、印象派の画家たちによる浮世絵の美の発見からはじまった。その影響力はパリ万国博をきっかけとして増大し、やがてガレを代表とする工芸や家具、インテリアに広がり、アール・ヌーヴォーの流行とともに全ヨーロッパに波及した。1920年代になっても、フランスでは日本的な「美」は特別な地位を保っていた。一方日本人を通じての直接の文化紹介も進んでいったが、なおステレオタイプを脱していなかった。

イギリスにおける日本美術、なかでも工芸品の受容は「唯美主義」と結びついて展開した。ヴィクトリア朝の繁栄を担った中産階級にととの「趣味の良さ」と同一視されることすらあった。その後も大陸のアール・ヌーヴォーとは一線を画した状況がつづいた。家具やインテリア等の装飾美術へ与えた影響に比すれば、美術への影響はウィスラーを中心とする小さなサークルの内部にとどまったといえる。

ドイツ語圏では1873年のウィーン万国博のインパクトが決定的であった。多くの日本の工芸品や浮世絵の収集を行なったブリンクマンは日本の美に魅了されていた。彼の講演や著書の影響で日本的な美学を学んだ版画家や工芸作家も多かった。日清・日露戦争の時代にもドイツにおける日本人気はつづいた。しかし、リヒトホーフエンの著書に由来する黄禍論の対象は中国から日本にかわっていく。

1880年代のアメリカではイギリスに10年

ほど遅れて、日本製の品物が飾られた室内が流行していた。しかしシカゴ万博が開催された90年代には、すでに「サムライ」のイメージが定着し、「武士道」が出版された。日本という国は一面で女性的なイメージを担っていたが、家父長制が崩壊する中で、男性性をあらわす記号として「サムライ」像が機能した。

以上の通り4カ国における日本(人)イメージを19世紀末から20世紀の初頭まで追うことは、ある程度できたが、それらを比較するという当初の課題は十全には果たされなかった。しかしアメリカの例をモデルケースとして考えることはできる。すなわち、日本(人)イメージを自国の社会・政治・文化的要請にしたがって利用し尽くすというのが、その実像である。

だが、このことが他の3国すべてに同様に当てはるか否かは今後の研究課題として残された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

① 新谷 好, ワイルドのアメリカ講演旅行とジャポニスム, 追手門学院大学英語文化学会論集(査読無)第20号, 2011, 13-25.

② 増崎 恒, 19世紀末から20世紀初頭にかけての米国における日本(人)イメージ——“Grandfather's Clock”(1876)に見るジェンダー・ポリティクスとの関連で——, 追手門学院大学英語文化学会論集(査読無)第19号, 2010, 25-44.

③ 新谷 好, 英国19世紀後期のジャポニスムの進展, 追手門学院大学英語文化学会論集(査読無)第19号, 2010, 59-74.

④ 水藤 龍彦, ウィーン万国博覧会(1873)とユストゥス・ブリンクマン, 追手門学院大学英語文化学会論集(査読無)第19号, 2010, 15-23.

⑤ 中村 啓佑, エミール・ガレと蜻蛉——ジャポニスムを考える手がかりとして——, 追手門学院大学国際教養学部紀要(査読無)第2号, 2009, 61-72.

⑥ 増崎 恒, Stephen Crane の作品に見る<日本(人)>イメージ——19世紀末米国の社会文化政治的視点から——, 追手門学院大学国際教養学部紀要(査読無)第2号, 2009, 73-90.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

水藤 龍彦 (SUITO TATSUHIKO)

追手門学院大学 国際教養学部・教授

研究者番号: 60131413

(2)研究分担者

中村 啓佑 (NAKAMURA KEISUKE)

追手門学院大学 国際教養学部・教授

研究者番号：40079398

新谷 好 (SHINTANI YOSHIMI)

追手門学院大学 国際教養学部・教授

研究者番号：40206321

増崎 恒 (MASUZAKI KO)

追手門学院大学 国際教養学部・講師

研究者番号：80434819